



#42

花の命は短くて……

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

俺は幼なじみの悠花に人気のない公園の裏山に呼び出された。
まだ残暑の厳しい休日の午後。蟬の鳴き声がやたらと耳につく。

「あのね……」

俺の正面に立つた悠花がおずおずと口を開いた。

簡素な刺繍の施された白いワンピースに、薄いピンクのリボンが巻かれた麦わら帽子……
という、いかにも夏らしいさっぱりした格好だ。心なしかいつもより頬が紅潮して見える。

「あたし実はね……」

俺を見つめる瞳も何かいつもと違う。一言でいえば、真剣だ。

長い黒髪がさらさらと微風に揺れている。

(これは……)

俺はごくりと唾を呑んだ。

これはあれじゃないか。いわゆる告白シーンというやつじゃないか……!?

いや、ちよつと待て！ そんな俺、心の準備ができてないし、いきなり言われても……そりゃ、悠花の事は嫌いじゃないし、いやむしろ好きだけど、そういう恋心っていうんじゃないかと……っていうか、ちよつとLIKEじゃなくてLOVEな気持ちもあるにはあるんだけど……あるんだけど、いきなりはまずいってばよー！

「あたし、あたし、実はね……」

俺がドギマギしている間にも悠花はどんどんこちらに迫ってくる。

ちよ、ちよつと待ってくれー！ マジで心の準備しねえと、こっちの心臓がばくばくいって爆発しそうだ！ 頼む、もう少し時間をくれー！

「頭がおかしくなっちゃったの！」

「……は？」

俺が思ってたのと、ちよつと……いや、全然違う台詞が悠花の口から飛び出した。

「あのね、頭がこんな風になっちゃったの！」

悠花がちよつと泣きそうな顔で麦わら帽子を脱いだ。

そこにあっただのは……。

「なんだそりゃ……?」

俺は悠花の頭の上に咲いているひまわりを指さした。

「知らない！ 今日、朝起きたら生えてたの！」

俺はもう一度まじまじと悠花の頭を見つめる。

黒髪に覆われた頭頂部から緑の茎がすーっと伸びている。

そしてその先にあるのはひまわりの小さな花。

とても夏らしい。

って、言ってる場合か！

「……俺をからかってるのか？」

口をついて出てきた冷たいトーンの台詞に、俺は自分でもちよつと戸惑った。
つていうか、そうだよ。

告白かと思つて超ドキドキしてたのに、さすがにこの展開はねえよ！

「違うんだよ、ひろくん！ 本当に！ 本当に生えちゃってるの！」

悠花は泣きそうな勢いでこちらにずいっと頭を差し出してくる。

「どーせ、オモチャの造花でも差してんだろ……ん？」

俺はひまわりの茎を引つ張った手に違和感を覚えた。

こいつ、すごいしつかり悠花に根付いていやがる。

まるで悠花の頭の中から直接生えてるみたいに……。

「痛い！ 痛いよ、ひろくん！ そんなに引つ張らないでよ！」

「あ！ ああ、悪い……」

俺は慌ててひまわりから手をひっこめる。

信じられないが、どうやら本気で頭からひまわりが生えてしまったらしい。

……つていうか、そんなことあるのかよ！

「ひろくん、どうしよう……このままじゃ、あたし、どこにも行けない……」

「そ、そんなことないぜ、それ結構似合ってるじゃん。夏らしいつていうか、頭がお花畑で

ハッピーみたいな感じつていうか……」

そこまで言つて俺は悠花の冷たい視線を感じた。

この残暑を吹き飛ばすような極北の視線だ。

俺的にはフォローのつもりで言つてみたのだが、どうやら完全に逆効果だったようだ。

「……とりあえず、病院に行つてみたらいいんじゃないか？」

「病院って何科に？」

「何科につてそりゃ……」

言葉に詰まった。

確かに頭に花が生えました……つて病院に行ったら、速攻で頭のおかしい人認定されてしま
うだろう。

「あはははは、ママー、すごいよー！ あのお姉ちゃん、頭にお花咲いてるー！」

「しっ！ タカシ、見るんじゃないやせん！ 早くこっちに來なさい！」

たまたま通りかかった親子連れにも、こうして速攻で認定されてるしな……。

「悠花、お前ひまわりの種でも食つたのか？」

「ウサギじゃないんだからそんなの食べないもん」

言うが早いか、ぶーつと膨れてそっぽを向きやがった。

「ひろくん、全然真剣に考えてくれてない！ あたしの事、大切じゃないんだ!？」

「そ、そんなことねえよ！……あ、そうだ、それ切っちゃえばいいんじゃない？」「そんなの最初にやったよ！でも葉っぱを切っていったら、まるで自分の体を切ってるみたいにすごい痛かったんだもん！これ以上無理だったんだもん！」

なるほど、だから茎と花だけなのか。

というか、痛覚神経も悠花と直結してるってことか……そいつはやっかいだな……。

「どうしよう、あたしずつとこのままなのか……ずーっと頭お花畑なのか……」

あからさまにしょぼーんとする悠花を見ていたら、さすがに俺の気持ちも落ち込んできた。

よくたとえて「ひまわりのような笑顔」とか言うけど、こいつの場合は「ひまわりを乗せた困り顔」だな。って、なんのシヤレにもなりやしねえ。

何かいい解決策はないのかなあ……。

「あっ！」

突然、俺の頭に天啓が閃いた。

「悠花、ちよつとついてこい！」

「え？何、ひろくん？どうしたの、急に？あっ……そ、そんなに引っ張らないですよー！」



「ここに頭をつけるんだ！」

「は？」

公園の噴水前にやってきた俺は、悠花に自信満々にこう言い放った。

「……どういことなの、ひろくん？」

悠花があからさまに訝しげな表情でこちらを見つめてくる。

「いいか、悠花。逆に考えるんだ！見たところそのひまわりはまだ小さい。つまり成長しきってないってことだ。だからここでたんまりと水をやればぐんぐん成長して……」

「大きい花になって、種をつけたあと枯れちゃう！枯れればとれる!？」

「その通り！」

我ながら素晴らしいアイデアだ。

「すっごーい！ひろくん、冴えてるー！」

「ま、まあな」

俺の両手を握りしめてびよんびよんとジャンプする悠花。

その……おっぱいが……揺れててちよつと目の毒だぜ……。

「それじゃ、早速いくね。よししょつと……」

悠花がおずおずと頭を噴水の水のかかるところに差し出した。

頭に花を咲かせた女が噴水を頭を突っ込んで……傍目には完全に危ない人だが、そんな

ことを気にしている余裕はない。

「おっ……」

しばらくして俺は思わず声を洩らした。

なぜなら水を吸ったひまわりが見る間にぐんぐんと成長しだしたからだ。

「すごい、ひろくん！　どんどん大きくなってくよ！」

「ああ、すげえな！」

頭に生えるだけあって、やはり普通のひまわりとは違うのだろう。

通常の植物では考えられないスピードで成長を続けていく。

やがてひまわりは悠花の身長と同じぐらいの高さまで成長して立派な大輪の花を咲かせた。

「よし！　あともう少しだ！　あともう少しでこいつは種をつけて枯れる……って、悠花？」

そこまで言っていて俺は悠花の様子がおかしいことに気がついた。

顔からすっかり血の気がひいている。

目も虚ろで意識が朦朧としているようだ。

「悠花!？」

俺の呼びかけにも反応しないまま、悠花は何も言わずにそのままゆっくりと噴水の池へと倒れてしまう。その全身に、噴水の水が容赦なく降りかかり始めた。

俺は慌てて悠花の許に駆け寄った。

「どうした、悠花!?　おい!？」

まったく反応がない。どうやら完全に気を失ってしまったようだ。

「うわ……」

俺は思わず目を見開いた。なぜなら。

「やべえ、透けてる……」

濡れたワンピースの向こうに禁断の柔肌が見え隠れしていたからだ。

これはやばい、目の毒ってレベルじゃないぜ！

「ひろ……くん……」

「悠花!？」

悠花の弱々しい呼び声に、なんとか俺は正気を取り戻した。

「なんだか……変なの……体から……どんどん力が抜けていって……」

「!」

瞬間、俺は自分の過ちに気がついた。

ちくしょう、何が素晴らしいアイディアだ！　俺のアホ！

こいつは水と一緒に、悠花から栄養も吸い取ってやがるんだ……！！

「悠花！　おい、悠花!？」

再びぐったりとしてしまった悠花を、俺は必死に揺り動かす。

そんな悠花とは対照的にひまわりの花はぐんぐんと成長を続けている。花の大きさはバスケットボールよりも大きくなっているぐらいだ。

「くそ！ やめろ！ やめろよ、このクソひまわり！」

俺は闇雲に花を拳で殴りつけた。

しかしまったく効果はなく、花はかえってどんどん大きくなっていく。

「やめろ！ やめろって言ってるんだろ！ 悠花から栄養を吸い上げるのをやめろって言うてるだろうがー！」

俺はさらに力を込めて花を叩く。

普通の花と違って堅いそれは、俺の拳を簡単にはじき返してくる。

くそ！ このままじゃ……このままじゃ……！

ボンッ！

「!?」

突然俺の視界が何かに塞がれた。

種だ。

突如爆発したひまわりの花から膨大な量の種が周りにまき散らされている。

「これは……」

呆然とする俺をよそに、種を放出し終えたひまわりは、ぐったりと頭を下げ、そのまま枯れてしまった。そしてポロリと悠花の頭からとれる。

「ひろ……くん……?」

「悠花!?」

悠花がうつすらと目を開ける。

「よかったな、悠花！ 取れたぞ！ ひまわり取れたぞ！」

「うわ……すごい……」

「?」

幻でも見ているのか、悠花がうっとりとな変なことを呟いた。

「!」

しかし俺も悠花が何をすごいと言っているのか、すぐに気がついた。

ひまわりだ。

ひまわり畑だ。

さきほど放出された種が瞬く間に発芽し、葉をつけ、その花を咲かせている。

見渡す限りの、ひまわり、ひまわり、ひまわり。

昔洋画で見た広大なひまわり畑のように、公園中がひまわりで埋め尽くされている。

「あのね、ひろくん……」

「ん？」

悠花が潤んだ瞳で俺の方を見上げてくる。

「もしかしたら、あのひまわりって……あたしの気持ち………思いが………生えて来ちゃったのかもしれない……」

「？」

悠花が意味不明の事を言ってくる。

「ひろくん、ひまわりの花言葉って知ってる？」

俺が首を振ると、悠花が頬を朱に染めながら教えてくれた。

曰く。

「ひまわりの花言葉は——「愛慕」——あなただけを見つめている——である、と。

「そ、それってもしかして……」

「あっ」

俺がおずおず問いかけようとした時、悠花の表情がぱっと輝いた。

そして「ひまわりのような笑顔」でこう言った。

「ひろくんもあたしと同じ気持ちなんだ！ 嬉しい！」

「？」

俺は——悠花の視線の先——すなわち自分の頭に手をやった。そしてその指先には、小さなひまわりの花が触れたのだった。

おしまい